

漢詩神奈川

第 23 号

神奈川漢詩連盟
事務局

神奈川県海老名市
浜田町16-9

TEL-FAX
046-233-7641

発行人 三村公二
編集人 高津有二

漢詩作法の中級者教育について

神奈川漢詩連盟会長 三村公二

平成三十年度総会で、新しい執行理事、運営委員としてそれぞれ三人の方が選任されたが、連盟の更なる発展の為に会員の声に真摯に耳を傾けて若い力を存分に発揮されることを期待したい。

と思う。

総会で報告したが、連盟のモットーである『漢詩で遊ぶ』については講師の先生方の御尽力のお蔭で、鑑賞会A、B、C、霧笛女子会に漢詩を作られない方々も積極的に参加して漢詩の面白さ、素晴らしさを楽しんでおられる事や、十周年記念漢詩大会や今回の総会での石川忠久先生のご講演、昨年末の市川桃子先生のご講演を一般公開にした結果、連盟外の漢詩大好き仲間が沢山参加してくれて大盛況であった事など、着実にその裾野が広がっています。

しかし、もう一方の『漢詩を学ぶ』の中核である『漢詩作法』に対する連盟の取り組み方についてはこれまで十分な議論をしてきていない。この十二年間、毎年、初心者入門講座を開いて初心者に漢詩作法の手ほどきをし、その後サークルを作っていたが、そこに先輩講師を派遣して定期的な勉強会を行うという漢詩作法を学ぶ場の設定はしてきたが、その運営・内容について特別な規制・配慮はしてきていない。『詩力の向上』はあくまでも個人の問題であるから、初級から更に上を目指す方々の為にそれぞれが適当な機会を見つけよう努力してくださいという気持ちからこの会報で漢詩教室の紹介をしているが、連盟内部に会員の為の中級者教育の場を設け、もっと力を入れていく必要はないのだろうか。

この三月の『サークル交流会』では河野光世先生にご指導をお願いし、「西郊日暮」とい

う詩題で各サークルが代表詩を提出、先生のご批正を仰いだのであるが、残念ながら合格点を頂けるレベルの詩はほとんど無く「神漢連の皆さんは『題詠詩』を全く理解していない、石川忠久先生もおっしゃっていただけるように題詠は絵でいえばデッサンで、デッサンが出来なければ上手な絵は描けません」と厳しいご叱正を頂いた。これまで連盟が正しい中級者教育をしてこなかった事にその原因があるのではないかと反省しているが、「題詠詩が重要だ」という事はよく分かった、来年も一度チャレンジさせてほしい」というのが会員大多數の声であった事は皆さんの詩力向上への熱意の表れであり、今後の連盟の対応策の在り方を示唆しているように思う。

現在のサークル勉強会の在り方を見直していただくだけで十分なのか、何らかの中級者教育の場を別途に設ける方が良いのか、皆さん方からの率直なご意見をよく聞いて連盟としての具体的な対応策を考えていく予定である。



三村公二会長



総会での三村会長挨拶

連盟の行事

第十三回神漢連総会開く！

事務局長 高津有二

五月三十日、午後一時より神奈川近代文学館ホールにおいて石川忠久先生、窪寺啓先生のご臨席のもと、会員六十余名が出席して、神漢連第十三回総会が開催されました。

総会では、三村会長から本年度の活動方針として「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」のローガンを継続していく中で、会員の詩力向上に神漢連として支援を強化していくことが示されました。

次いで、事務局から活動報告、今後の活動計画、決算報告、予算計画(本頁中段参照)、規約改定案、人事案(本頁下段参照)が提案され、若干の質疑のあと、承認されました。

総会の議事終了後、石川先生の講演「白楽天の詩と人生」が実施されました。今回は外部にピラ、新聞掲載等でPRを行ったため、総勢二〇〇名を超える聴講者がありました。(本紙四頁、五頁参照)

また、当日午前中、寄贈本の頒布会を行いました。(本紙三頁上段参照)

平成二十九年度決算・三十年度予算

平成 29 年度田原基金決算			平成 30 年度一般会計予算案			平成 29 年度一般会計決算		
区分	費目	金額	区分	費目	金額	区分	費目	金額
収入	田原先生ご遺族からの寄付	1,000,000	収入	前年度より繰越	302,284	収入	前年度より繰越	382,103
支出	無し	0		年会費	514,000		年会費	547,000
残	次年度繰越	1,000,000		行事参加費	730,000		行事参加費	725,710
平成 30 年度田原基金予算案				その他	945,000		その他	1,000,950
区分	費目	金額	支出	経常費	657,680	支出	経常費	813,021
収入	前年度より繰越	1,000,000		行事費	834,000		行事費	893,122
支出	検討中	—		その他	771,000		その他	647,336
残	次年度繰越	—		残	次年度繰越		228,604	残

平成三十年度人事

☆理事

玉井幸久 石川省吾 古田光子
岡田泰男 横山真吾 桜庭慎吾

☆執行理事

三村公二(会長)

水城まゆみ(副会長) 中島龍一(副会長)
高津有二(事務局長) 香取和之(事務局次長)
吉岡昭夫 室橋幸子 川上修己 飯島敏雄 瀧川智志

新井治仁(新任、詩游会) 大森冽子(新任、以文会) 山口幸雄(新任、九詩期会)

☆監事 柴田 洋 松井秀人

☆特別相談役 岡崎満義

☆相談役 住田笛雄

☆顧問 問

石川忠久 窪寺 啓 浅岡清明
三上光敏 池上一利

☆運営委員

家吉幸二 犬飼 堯 牛山知彦 岩波弘道 山岡健郎
芝 公男(新任、八起会) 細江利昭(新任、十期会) 篠崎吉之(新任、詩林会)

(参考)

☆竹林舎

玉井幸久 飯沼一之 城田六郎
古田光子 住田笛雄 桜庭慎吾

寄贈本頒布会―短時間で完売

総会が開かれた五月三十日の午前中、故田原健一副会長と磯野衛孝氏(鎌倉漢詩会主宰)の寄贈本二百六十冊の頒布会を開催した。この催しは今回で三回目であり、漢詩集、辞書・韻書類、及び漢詩のバックグラウンドとなる歴史・紀行文など、神漢連大先輩の蔵書を超廉価で会員の方々にお分けし、漢詩鑑賞や作詩に役立てて頂きたいとの趣旨である。

今回も十時の開催時刻前から、三十名弱の方々が寄贈本を囲み、虎視眈々と狙いを定めていた。頒布は先着順だが、大漢和辞典、佩文韻府、円機活法などの大型図書については、今回は希望者間の抽選とした。この為、会場内はいつもの通り、悲喜こもごもの情景だった。尚、寄贈本は約四〇分という短時間のうちに完売し、売上は神漢連へ入金された。

(香取和之)



熱心にお目当ての本を探す会員

十二期初心者入門講座と受講者の声

初心者入門講座(十二期生集う)

今年度の初心者入門講座は二十名弱の方々の参加で実施され、例年通り五回の講座で全員七言絶句が作詩できるようになった。今回は約半数の女性が集うとともに活気ある勉強会となり、今後の十二期生の新サークルに期待したい。

(川上修己)



12期生と講師の方々

趣味の漢詩 ―更なる一歩へ―

十二期 小林弘子

新緑の美しい横浜、近代文学館の第十二期生として「初心者講義と実習」に参加することに致しました。思えば、漢詩・漢文に接した大昔以来、始めての事です。

きっかけになったのは、一昨年、開港記念館での漢詩の会です。当日恐れ乍ら参加した私に、一枚一個の漢字が渡され、七枚で一句を作る作業でしたが、傍らに待機された先生方が巧みに希望の字や好みを聞き、次々と漢字の

並べ方を教えて下さり一句を作りました。階下では、行楽に参加された方の漢詩と、それに伴うスケッチ他の展示、これは忘れられません。漢詩の世界に更に新しい動きが見られたのです。自分の漢詩を、小篆の字体で記し、中国語で朗詠し、また写真・スケッチ等色々の形で表現できる嬉しさを感じました。

もう一度、原点に戻って、漢詩の作法を習得し「趣味の漢詩」を原点から習いたいと思っ

ての参加です。
添削に当たり、先生方の巧みな誘導と豊富な溢れる言語力に間を置かず変化する自分の語を見て、嬉しさ一杯です。「趣味の漢詩」です。自分なりに進めることができれば本望です。

秋開催の「研修会」へ投稿と参加のお願い

毎年行われております「研修会」は会員の提出詩を参加者による選句方式(特選二点、佳選一点、持点五点)で評価して楽しむ会です。初心者でも高得点を得られることもあり、中・上級者でも高い点を得られない場合もあります。その後の批評会が作詩におおいに役立ちますので恐れずに多くの方々の投稿と参加を期待しております。開催、投稿については十六頁をご覧ください。

(川上修己)

白楽天の詩と人生
 —石川忠久先生講演会—
 二〇〇名を超える聴衆を魅了!
 (平成三十年五月三十日神漢連總會後)



講演に熱がこもる石川先生

私が大学を卒業したばかりのときに、この神奈川の翠風高校で非常勤講師を週一回、八年間務めたので、懐かしい思い出がたくさんあります。

さて、白楽天は我が国において最も読まれた詩人です。李白や杜甫よりも人気があつて、遣唐使のころから白氏文集をたくさん買つて日本に帰ることが多かったのです。

李白・杜甫は盛唐の人ですが、白楽天は少

し後の中唐の人です。なぜ人気があつたかと言うと、一つは詩が分かりやすい。もう一つは、長生きして七十五歳まで生きたことです。そして大臣クラスまで偉くなったことがあります。李白は六十二歳、杜甫は五十九歳で死に、この二人は役人として偉くはならなかったのです。

白楽天が十六歳で都にきて、当時の大詩人、顧況こきやうに面会しました。況は楽天の名の居易を見て、長安は暮らし易くはないぞとからかいました。しかし次の詩を見て驚き、若くして、このような詩を作れるならば、君は楽に生活できると賞賛したのです。これが出世作となり、楽天の名は一挙に高まつたのです。

最後の二句は、親しい友を見送ることとなり、別れの悲しみはつきつぎに生えてくる草のように、わが胸に沸き起こつて尽きないという意味です。

八月十五日夜 禁中独直
 禁中に独り直し

对月憶元九 月に対して元九を憶う

銀台金闕夕沈沈 銀台金闕夕べ沈々

独宿相思在翰林 独宿相思いて翰林に在り

三五夜中新月色 三五夜中新月の色

二千里外故人心 二千里外故人の心

渚宮東面煙波冷 渚宮の東面煙波冷やかに

浴殿西頭鐘漏深 浴殿の西頭鐘漏深し

猶恐清光不同見 猶おぬる清光同じくは見ざらんことを

江陵卑湿足秋陰 江陵は卑湿にして秋陰足し

賦得古原草 古原の草を賦し得たり
 送別

離離原上草 離々たり原上の草

一歲一枯榮 一歲に一たび枯榮す

野火燒不尽 野火燒けども尽きず

春風吹又生 春風吹いて又た生ず

遠芳侵古道 遠芳 古道を侵し

晴翠接荒城 晴翠 荒城に接す

又送王孫去 又た王孫の去るを送れば

萋萋滿別情 萋々として別情満つ

賦得とは詩を奉る(見て頂きたい)という意であり、律詩ですから三四句と五六句は見事な対句になっています。

この詩は七言律詩で、作るのが最も難しく、これが出来れば詩を作る人としては一人前と言えます。

元稹は白楽天の親友です。官僚登用試験の科擧の成績は、元稹が一番、楽天は四番でした。元稹のほうが、出世が早かったから左遷されるのも早かったのです。その友人が都から追われ南方の田舎で苦勞している友を憶う詩です。

この詩こそ、和漢朗詠集に載せられ、日本で知られるナンバーワンの詩と言えます。禁中で独りで宿直している楽天が、元稹を心配し同情しているのです。

三句と四句の対は見事です。五句は元稹のいる宮殿、六句は楽天の居る禁中のことです。

香炉峰下新卜山居 香炉峰下新たに山居を卜し

草堂初成偶題東壁 草堂初めて成り偶東壁に題す

日高睡足猶慵起 日高く睡り足りて猶お起くるに慵し

小閣重衾不怕寒 小閣の衾を重ねて寒さを怕れず

遺愛寺鐘欵枕聽 遺愛寺の鐘は枕を欵てて聴き

香炉峰雪撥簾看 香炉峰の雪は簾を撥て看る

匡廬便是逃名地 匡廬は便ち是れ名を逃るるの地

司馬仍為送老官 司馬は仍お老いを送るの官為り

心泰身寧是帰処 心泰く身も寧きは是れ帰する処

故郷何独在長安 故郷何ぞ独り長安にのみ在らんや

この詩は楽天自身が江西省に左遷されたときの心境を詠っています。

匡廬は廬山のこと、自分の居所、司馬は

は県の次長のこと、県は郡の下ですから

(日本とは逆)小役人を意味しています。楽天

は左遷されても悲しんではないと詠って

いますが、強がりです。言えは言うほど、胸

の内は長安に帰りたいということになるの

です。

送王十八帰山 王十八の山に帰るを送り

寄題仙遊寺 仙遊寺に寄題す

曾於太白峰前住 曾て太白峰前に於いて住み

数到仙遊寺裏来 数しば仙遊寺裏に到りて来たる

黒水澄時潭底出 黒水澄む時潭底出で

白雲破処洞門開 白雲破るる処洞門開く
林間煖酒焼紅葉 林間に酒を煖めて紅葉を焼き
石上題詩掃緑苔 石上の詩を題し緑苔を掃う
惆悵旧遊無復到 惆悵す旧遊復た到ること無きを
菊花時節羨君迴 菊花の時節君が迴るを羨む

この詩は、白楽天がかつて遊んだ寺は景色がよく、紅葉で酒を暖めたり、詩を石の上に書いたりした。しかし昔楽しんだこの場所に再び行けないのだ。だが、君はそこへ帰ってゆくという、それが羨ましいと言っています。王十八は楽天の友人で、勧めて長恨歌を作らせた人です。

対酒

蝸牛角上争何事 蝸牛角上何事をか争う

石火光中寄此身 石火光中此の身を寄す

随富随貧且歡樂 富に随ひ貧に随ひて且く歡樂せん

不開口笑是痴人 口を開いて笑わざるは是れ痴人

この詩は、世を達観して詠っています。世の中のことは、蝸牛の角の上のような小さなところで、争ったりしているようなものだ。石火光中は一瞬の人生。富や貧乏は共に楽しんで、笑って暮らさないものは馬鹿だ、と言っています。言われてみるとその通りだなあと思います。

白楽天は、挫折を味わいながら、人生を乗り越え、官僚として、詩人として成功した人です。今日はその代表的な詩を紹介しました。

(石川先生には約二時間にわたって、八首の解説をして頂きましたが、紙面の関係上、五首を掲載させて頂きます。)

(中島龍一)



熱心に聞き入る200名余の聴衆

第五回サークル交流会 (バトル漢詩甲子園)開催大盛況

三月二十九日(木)、例年になく早い満開の桜に蓋われた横浜山手の神奈川近代文学館において、第五回サークル交流会として三年ぶりのバトル漢詩甲子園が開催された。

今回は九期以降のバトル初経験四サークルを加えた十三サークル会員のほか、合計八十二名(その他無記名数人)が参加する盛況となった。

前回にならない「詩題」を事前に決める方式を採用し、批評・講評をお願いした河野光世先生から「西郊日暮」の詩題を頂戴した。半年間に渡るサークルの先生の指導無しでの試行錯誤は、会員にとって貴重な経験となった。



バトル会場風景(最前列がバトルラー各位)

当日前半は、十二首の各サークル代表漢詩(直近創設の十一期「詩林会」は提出免除)について、一首ずつ十三名のバトルラーと会場参加者が議論を闘わせた。これまでの勉強知識や

大漢和・搜韻を調べ上げた上での指摘に会場が感心する一方で、勘違いの批評があったり、指摘に対して回答者がフリーズする場面もあったりと、真剣な中にも和気藹々の雰囲気で行った。



河野光世先生の批正、講評

後半は、河野先生の批正、講評、窪寺先生のコメントと続いたが、貴重なお話をゆっくりとお聞きする時間がなかったことは、誠に申し訳ない状況であった。

それでも、会場の参加者は、河野先生的確かつ丁寧なたくさんの批正を聞き逃すまいと、謙虚に聞き入っていたのが印象的であった。

更に、河野先生から、漢詩作りにあたっては「不必要なものは本当のことでも省く」とことや、「題詠は作詩上達のための必須の階梯」とのポイントを突いたお話を頂き、一同納得した次第である。

河野先生の選考により、優秀詩として以下に掲げた三首が選ばれた。また、優秀バトルラーは、嶋内隆行(好文会)、板本健作(詩游会)、山岡健郎(七步会)の三氏が選ばれた。

第一席(七步会)

郊原獨佇草叢荒 郊原独り佇めば草叢荒れ

獨游郊野桂花香

飛來飛去忙 赤卒飛び来たり飛び去って忙し

赤卒相逢舞由芒

途尚 日暮れ風寒くして途尚ほ遠く

日暮風寒(尚)途遠

欲沈 日 沈まんと欲する残日影徒らに長し

孤雲殘照影徒長

第二席(八起会)

返照長 赤卒群飛して返照長し

赤卒群飛遯夕陽

高 高風野を払い清涼を送る

微風拂野送清涼

歸 去後秋光靜 帰鴉去りし後秋光静かに

棲鴉比翼旋空曲

時聽 世塵忘 時に疏鐘を聴けば世塵忘る

何處疏鐘憶故郷

第三席(金星会)

西郊曳杖夕陽斜 西郊杖を曳けば夕陽斜めなり

荒草搖風一望遐 荒草風に揺らぎ一望遐なり

四面枯林籠赤霞

赤卒羣飛懷 赤卒群飛し故里を懐ふ

獨立田疇思故舊

忘時獨佇噪 時を忘れ独り佇めば帰鴉噪く

夫漣玉五望歸鴉



懇親会での窪寺先生ご挨拶

が次々と続き、あつという間に楽しいサークル交流の時間が過ぎていった。

特に記憶に残るのは、最優秀詩が喜多さんの遺作であったとのサークル紹介と、この詩は「詩識」となって作者のことを暗示していたとの窪寺先生のお話でした。

なお、窪寺先生ならびに河野先生から、次の玉韻を頂戴した。

窪寺 啓先生 玉韻

臨港櫻丘風蕩駘 港を臨む桜丘風蕩駘

高堂鷗鷺鬪詩來 高堂の鷗鷺詩を鬪はせて來る

論評審評興無盡 論評審評興尽きる無し

偏俟誰誇奪錦才 偏に俟つ誰か誇る奪錦の才

河野光世先生 玉韻

千紫萬紅金港春 千紫萬紅金港の春

鷗盟相集鬪才頻 鷗盟相集ひ才を鬪はすこと頻りなり

懇親会は、いつも通り会場をポートヒル

横浜に移して総勢五十六名

が出席して行われた。各サー

クル・バトラーの苦労談をはじめ、楽しいス

ピーチや受賞

作品等の吟詠

宜尋風雅先人句 宜しく風雅を先人の句に尋ね
勉勵交歓共覓眞 勉勵交歓して共に眞を覓むべし
(牛山知彦)

バトル漢詩甲子園一等賞受賞に寄せて

七歩会 山岡健郎

目の前に記念写真がある。五年前会が発した日、皆良い笑顔だ。あの時の酒は美味かったね、喜多さん。受賞を電話でお知らせした時の奥様のお喜びの声が忘れられない。

喜多さんは最後の例会で自分の病気について我々に淡々と語り、抗癌剤治療を受けながらもメールで一緒に推敲を繰り返した。喜多さんの思いを汲みつつも、時には意見が激しく対立したが、最後の詩と自覚している彼はなかなか自説を曲げない。最後は会員の投票で最終案を決めた。選者にお褒め戴いた「影徒長」も全員の推敲の結果である。

今までの人の詩をここまで思いを込めて推敲することはなかった。辞書を引き、ネットで調べ、読み下しを朗読し、中国語でも読んでみる。自分の詩には客観的になれず、これ以外にないという思い込みと思いがりで終わりだが、人の詩を客観的に見るのがこれほど勉強になるとは思いもよらなかった。

河野先生には題詠詩の意味と作詩の基本を教えていただいた。作者の思いはさておき、詩として評価できるか否かを第一に、心してこれからも詩を紡いで行こう。

バトラーの声

好文会 嶋内隆行

第五回バトル漢詩甲子園では、各サークル十三名のバトラーで討論いたしました。私は、自分の会の詩が聴衆の方々にわかりやすく伝わるように「どう読むか」ということに力を注ぎました。つまり読み下し文と解釈文とを明瞭に且つゆつくりと話すように心がけました。他のバトラーの方々からは、提出された詩の一字一句を漢和辞典で調べたとの発言もあり、各サークルの詩の良い点や問題点等をしつかり指摘されました。皆さん十分に準備して出席されたと感じた次第です。

河野光世先生は、初心のうちには題詠詩を勉強することが大事だということを強調されました。与えられた詩題を心に思い浮かべ、それを言葉にまとめ上げる。こうした練習を積み重ねることで詩を作る要領がつかめるようになる。「西郊日暮」であれば「秋の野辺」の「日暮れ時の興趣」が詠われていなければならぬ。その題意は起句・承句までに詠い込む。少なくとも転句までに詠うものだとお話ししました。

今回優秀バトラーの一人に選んでいただき大変驚いております。これからは他の会の作品の良いところ、直すべきところを発言できるように「詩を理解する力」をつけてゆくよう努力致します。

会員の活動

漢詩サークルと漢詩鑑賞会の一年間の活動

現状と展望

事務局長 高津有二

神漢連の活動のモットーである「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」の屋台骨となっているのは、まさに漢詩サークルと漢詩鑑賞会である。それぞれの講師の先生方の並々ならぬご苦労に對しては衷心より御礼を申し上げたい。

漢詩鑑賞会は、漢詩詩作はちよつとという人にとつても漢詩に接することが憩いの場であり、心の安らぎを感じて頂いていると確信しており、先生方にご無理をお願いして内容の更なる充実を図っていききたい。

一方、漢詩サークルについては下表の通り現在十三サークルであるが、古いサークルでは設立から十年以上を経過して会員の高齢化もあり、新人が加入して逆に活性化したという声も聞こえてくる。一般のバトル漢詩甲子園では、河野先生の厳しい評価を頂いたこともあり、各サークルの自主性を尊重しながらも、作詩力向上に向けてお互いに切磋琢磨できる文字通りのサークル交流の場を設けてはどうであろうか。

漢詩サークル一覧

開始年、区分	サークル名	会員数	代表者	指導者	開催月・曜日	特記事項
H19、1期	金星会	7名	三上光敏	飯沼一之	偶数月・第2火	新人1名入会
H20、2期	三水会	11名	中島龍一	古田光子	奇数月・第3水	活動者は7名
H21、3期	好文会	9名	高津有二	城田六郎	偶数月・第3木	H30年2月第50回、新人2名入会
H22、4期	詩游会	11名	川上修己	住田笛雄	偶数月・第2火	真鶴吟行会(H29年5月)、小田原清閑亭観月吟詠会(9月)(会報22号参照)
H23、5期	五友会	7名	飯島敏雄	住田笛雄	偶数月・第2木	H30年6月故田原健一先生追悼詩集出版
H24、6期	以文会	13名	香取和之	桜庭慎吾	奇数月・第3木	指導者交代(H30年5月)、代表者交代
H24、岳精会	岳精会漢詩研究会	8名	家吉幸二	城田六郎 三村公二	偶数月・第3水	例会にて自詠自吟
H25、7期	七歩会	10名	山岡健郎	川上修己 水城まゆみ	奇数月・第4水	例会参加者は平均5名、代表者交代
H26、8期	八起会	13名	芝 公男	中島龍一	奇数月・第3木	代表者交代
H27、9期	九詩期会	16名	山口幸雄	古田光子 大谷明史	奇数月・第2木	中国江南漢詩ツアー(H29年10月)(会報22号参照)
H28、千代田岳精会	千代田岳精会漢詩研究部	14名	犬飼 堯	桜庭慎吾 香取和之	偶数月・第1木	例会にて自詠自吟、新人1名入会
H28、10期	十期会	11名	細江利昭	高津有二 川上修己	奇数月・第3木	代表者交代、初回からの修正詩稿の内部取り纏め
H29、11期	詩林会	9名	篠崎吉之	中島龍一 飯島敏雄	偶数月・第2水	H29年12月初例会

漢詩鑑賞会一覧

名称	講師	曜日・時間	会場	問合せ先	概要
鑑賞会A	玉井幸久	第4木 13:15-15:45	地球市民かながわ プラザ(本郷台)	瀧川智志 045-516-1234	唐詩を順次鑑賞。孟浩然、李白、杜甫、白樂天を終え、現在王維の詩と人生を解説中。
鑑賞会B	住田笛雄、他	第4金 14:00-16:30	県立公文書館 (二俣川)	川上修己 042-745-6906	「聯珠詩格」の勉強とこれに伴う作詩。会報22号紹介記事参照。
鑑賞会C	城田六郎、桜庭慎吾、 住田笛雄、三上光敏	第4火 13:30-16:00	神奈川近代文学館	川上修己 042-745-6906	「七言絶句ここから一步」に基づき、毎回12首を白文から読み解く。
霧笛女子会	古田光子	偶数月、第1火 13:00-15:00	県民センター (6月より)	水城まゆみ 0463-87-2657	女性詩人、女性の関係する詩を中心に解説。

注) メールアドレス、瀧川: takigawa.ty@jcom.zaq.ne.jp 川上: kwkm23312@tbz.t-com.ne.jp 水城: mmizuki@kfz.biglobe.ne.jp

「金星会」に入会して

金星会 安藤啓子

漢詩サークル「金星会」に加えていただいたのは、九期の初心者入門講座の修了時です。

講座修了後の漢詩作詩などを引き続き仲間と共に研鑽できるサークル活動の紹介がありました。早速各サークルの例会場所や日程、活動概要などから継続的に参加できそうに思えた「金星会」を選択したのです。初回参加の平成二十七年八月十三日以来、隔月一回の例会を欠席せず楽しく詩作などに取り組んでいます。

連盟のある集りで「あなたは何期？」と問われ「(九期で)金星会です」と答えたところ「えっ！大先輩方についていけるの？」とたいそう驚かれたことがあります。

第一回入門講座修了者漢詩サークルである「金星会」が様々に注目されていることを知らされました。

例会は通常主に詩作に関して、毎回全メンバーの提出した七言絶句を舍友飯沼一之先生のご指導のもと研修・検討します。そしてそこから広がる新知識や新情報を手につき漢詩に関して興味がいかに深まります。また、「金星会詩集 第一集」の編集や参考文献の配布などこれまでの体験を活かして充実したサークル活動に積極的にかかわっていききたいと思っています。

好文会詩会五十回を迎えて

好文会 瀧川智志

好文会は平成二十一年度の新人研修会終了後、十一名で結成されたサークルです。以来、隔月一回、一度の休会もなく詩会を重ね、本年二月、第五十回の節目の会を迎えることが出来ました。

その間、高齢者集団の宿命で体調の不具合のため退会なさる方や、悲しいことに他界なさる方もあり、一時、会員六名に減少しましたが、昨年、幸いなことに三名の新会員を迎えることができ、現在、九名で、来年十周年の「好文会詩集(第二集)」の発刊を目指して活動を続けています。

この節目の年を記念して、会員それぞれの思いを込めた祝詩を作り始めましたところ、早速、桜庭、城田両先生から賀詩を頂戴いたしました。好文会の活動の一端をご賢察いただきたく、紙面の都合上、ここでは師弟応酬の代表作各一詩を紹介いたします。

賀第五十回好文会

城田六郎

好文翁媪自論交 好文の翁媪 自から交を論ず

歳歳花開梅樹梢 歳々花開く 梅樹の梢

半百重回迎戊戌 半百回を重ね 戊戌を迎え

詩盟麗澤倍投膠 詩盟麗沢 倍ます膠を投ず

和韻賀第五十回好文会

室橋幸子

半百研修路已交 半百の研修路已に交わり

好文意氣滿花梢 好文の意気 花梢に満つ

非才求道方繕卷 非才道を求め 方に巻を繕くも

未到詩盟天地包 未だ詩盟天地を包むに到らず

第三回「自詠自書展」開催

— 交流の輪一段と広がる —

金星会 上田尤子

神奈川県漢詩連盟会員有志による第三回「自詠自書展」が、総会に合わせて五月三十日(水)から六月三日(日)まで、花咲き乱れる港の見える丘公園にある大佛次郎記念館で開催されました。

今回はこの素晴らしい環境のなか、力作二十一点を展示致しました。約三百名の方々にご覧いただき、幹事一同大変嬉しく思っております。これも偏に出品者の皆様のご協力の賜物と、深く感謝しております。

当展は神奈川県漢詩連盟の会員であれば流派会派を問わず、どなたでも出品できます。今年も漢詩と書を愛し、人との繋がりを求める仲間が結集しました。漢詩と書の融合は、人生に新たな彩りを与えてくれるものと信じております。

来年は更に多くの同好の皆様のご参加をいただき、自詠自書の交流の輪を広げて参りたいと思います。



展示幹事一同

会員だより

自詠自書への道

金星会 三上光敏

連盟のモットーは「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」、ここでは「漢詩で遊ぶ」について漢詩と書の世界について卑見を述べたい。

一般に「遊ぶ」ことはその手段が多いほどより楽しむ世界は広い。書の世界は通常、漢字、かな、近代詩文、大字書(少字書)、篆刻及び前衛書等に分類される。又、文字の種類から漢字・「かな」という分類もある。しかし、ここでは漢詩を中心に、漢詩―「漢字の書」の世界が対象。漢字を書く人達に漢詩に目を向けて頂くためにはまずは漢詩を学ぶ人(漢詩人)が書をやり、楽しむことだと思ふ。漢詩人は書に興味はあっても、その世界に入ることに躊躇される人が多い。所謂敷居が高い。そこでひとつの方法を提案したい。それは漢詩人に対して書作品が出来るように少しく手を差し伸べること、指導すること。例えば「漢詩人のための書作品への超簡単入門講座」等の開催で書への啓蒙を試みたらどうだろうか。一例を挙げれば自詠の絶句の中から気に入った一句や、一・二字を書いたり、更に簡単な落款の書き方等を指導すれば所謂「自詠自書」への敷居はかなり低くなると思ふ。先ず

はやってみたら如何だろうか。幸い連盟には書の先生は大勢おられる。

詩吟が好きそして漢詩作りも好き

詩游会 横溝比呂美

詩吟、朝翠流の門を叩いて凡そ四十年。その間中国、日本漢詩人の詩を如何程朗詠して来たのであろうか…。

詩吟は元来口授(口伝)に依って教えられ。コンクールに明け暮れていたある時期、思うように評価されない自分の詩吟にどうしたら良いのだろうかと考えた。一篇の詩の、詩心を表現するには自らも学ぶ必要を感じ、紆余曲折の末辿り着いたのが、漢詩作りを学ぶ詩の成り立ちを理解する事だった。

漢詩作りの約束事に添って、日々漢字に接していると、古人の数多の素晴らしい詩の背景にも心が寄せられ、詩人に対する思いが一層深まってきた。例えば観る、見る、見る、の漢字が使用されている風景詩を手にした時、作者の意図する距離感を感じ、自分ほどのように表現したら良いだろう…と考える。今では漢詩作りが私の詩吟を支える大きな力となっている。

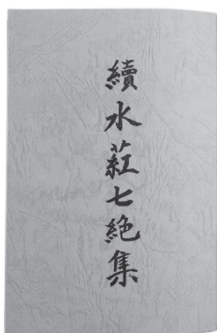
詩吟のコンクールでは節調は無論、天性の声に鍛錬された吟声に加わった声が高評価される。声が衰え評価にも値しないと感じた時、漢詩作りが有った!と、韻を踏み踏みまた前に進もう。十年前に始めた漢詩作りは、老いた心にも微かな光をもたらしてくれそうだ。

古田水菘先生の「続水菘七絶集」刊行

水城まゆみ

此の度、神漢連の理事で霧笛女子会の講師をされている古田水菘先生が「続水菘七絶集」を刊行されました。内容は第一部「閑居雜詠」第二部「客中偶詠」第三部「詩會題詠」となっています。

かつて漢詩コンクールで数々の賞を受賞された先生の詩は起承転結の流れが処を得て淀みなく、主題にふさわしい詩語の用い方などお手本となる詩ばかりで、参考にさせて頂いています。又中国古典に対する造詣が深く、客中雜詠では左半分に書かれているエッセイを読むと過去と現在の様子が描かれていて色々な所を訪問されていることに驚かされます。このエッセイを読むのも又楽しみで古田先生の温かいお人柄がよく現れていると思えます。先生の詩はどれも素晴らしい詠ばかりですが、多久市で開催される「全国ふるさと漢詩コンクール」で見事最優秀賞に輝き詩碑にも刻まれている詩を紹介いたします。



湯島聖堂秋

湯島聖堂の秋 古田水菘

楷樹森森氣爽然

楷樹森々として気爽然

杏壇講和徹秋天

杏壇の講和秋天に徹る

無風黃葉蕭蕭下

風無くして黄葉蕭々として下り

埋盡温容聖像邊

埋め尽くす温容の聖像の辺

学士会理事長杯に桜庭さん選ばれる

三水会 中島龍一

二〇一七年度の学士会の理事長杯は裁錦会最優秀作として、わが県連の桜庭慎吾氏が受賞されました。これは裁錦会の会員の投票によつて選定されました。裁錦会二位優秀作は玉井幸久氏(元理事長杯受賞)、三位佳作は石川省吾氏といずれも神漢連の会員でした。桜庭さんの律詩を紹介します。

遣懷絲綢路

在洲 桜庭慎吾

緑洲紅柳藪

緑洲紅柳の藪

炎吳古今同

炎吳古今同じ

滾滾天山水

滾々たる天山の水

飄飄青海風

飄々たる青海の風

隣村千里外

隣村は千里の外

蜃市萬沙中

蜃市は万沙の中

斜照煙霞上

斜照煙霞の上

崑崙連峭雄

崑崙の連峭雄なり

(注)緑洲 オアシス。紅柳タマリスク(叢性)。炎吳 灼熱の夏空。三句目はカレース(地下水路)。蜃市 蜃気楼。

なお、裁錦会とは学士会(会員四万七千人)の中の漢詩同好会です。昭和六年に創立され戦時中一時活動を中止しましたが、現在、会員約三十名(内女性四名)で学士会館内で二か月ごとに活動しています。作品は学士会報に掲載されます。神漢連からは、玉井幸久氏他計七名が参加しています。

第五回漢詩朗読・創作発表大会

主催 桜美林大学孔子学院
以文会 大森冽子

平成三〇年一月二十七日に相模原市の桜美林大学淵野辺キャンパスで開催の大会へ観客として参加しました。石川忠久先生の「漢詩の愉しみ」と題する短い講演に始まった大会は、恰も教室の生徒が教壇の前にて発表するようなアットホームな雰囲気のもので、想像していたのとは異なり、優秀を競うというよりは小さな子供から学生、大人まで日ごろの活動の成果をいきいきと発表するフェスティバル感覚に近いものでした。

朗読の部の参加資格は、国籍を問わず中国語を母国語としない者。発表の仕方も多種多様で、趣向を凝らした感情豊かな朗読は聞いても見ていても大いに感心しました。中国語での朗読はそれなりの学習がないとさすがにハードルが高いと思いましたが。創作の部の参加資格は、国籍問わずしかも中国語を母国語とする者も対象。詩は作れても中国語での朗読が出来ないという人も、孔子学院の学生さんの代読の協力があるので日頃の自作の漢詩で参加が可能です。次回以降チャレンジして楽しんでみてはいかがでしょうか。

朗読の部では室橋幸子さんが「春暁」の中
国語朗誦と書道吟で最優秀賞を、志村典子さんが「元二」の安西に使用するを送る」で審査員特別賞を受賞。創作の部では板本健作さんの「元日棋客」と高田宗治さんの「日光東照宮三

猿教」が優秀賞を、また志村典子さんの「回想東支那海」が特別賞を受賞。

神漢連参加者全員が受賞という喜ばしい新春にふさわしい幕開けとなりました。ちなみに最優秀賞は昨年の三村会長に続き二年連続の受賞となりました。並み居る中国語達者達をしり目に神漢連参加者が高評価を得たのは日頃の活動の成果ではなからうか。

審査委員長は石川忠久全日本漢詩連盟会長。他に、楊院長及び諸先生方。参考までに審査基準は朗読の部 発音4リズム2感情4 創作の部 内容5形式3総合2



石川先生より室橋さんに表彰状授与

訃報

神奈川漢詩連盟の会員 喜多 基氏は平成三十年二月十一日に逝去されました。(享年七十二歳)ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

特集—漢詩作法教室

特集のねらい

神漢連では各漢詩サークルは二か月に一回神漢連講師のもと例会を開き、各自が提出した詩稿をもとに漢詩作法を勉強し、またサークル内の親睦を深めている。一方、二か月に一首では物足りずもつと作詩したい人、またさらに漢詩が上達したいと思っている人も多いと思われる。

本特集はこれらの方々にとどのような漢詩作法教室があるかを紹介するものである。漢詩作法教室としては、神漢連会員が一般的に通える地理範囲とした(別表「漢詩作法教室一覧」参照)。教室の受講費や詳細の内容、さらに定員に空きがあるか等は、別表の「問合せ先(主催者)」に電話で個別に問合せ願いたい。(香取和之)

斯文会 漢詩作法の講座紹介

住田笛雄

湯島聖堂(斯文会)には、約六十の文化講座が毎年開催されている。その内、漢詩の作法講座は六つある(他に通信講座が一つ)。それぞれを以下に簡単に紹介します。(番号は別表中の項目を示す)

① 初めて作ろうとする人と、一から学び直

② したい人が対象。個別に対面指導が特徴である。(講義形式ではありません)誰にでも漢詩を作ることが出来るようにする事を目的として、宿題として、提出した漢詩を添削し、指導される。何故添削がなされたかを説明し、それにより、漢詩とはどういうものか、その一端が分かるように指導される。

③ 漢詩の作り方に幾らか慣れてきた初級者が対象。更なる技術の向上と、心の表現が出来るようになることを目標として指導される。形式は、入門講座とほぼ同じ。

④ 中級者を対象に、漢詩を作る基礎を重点に、実作指導をされる。折々に名作の鑑賞の為に話をされる。

⑤ 上級者を対象として、漢詩の実作指導を行う。七言絶句を主として実作を添削し、批評する。作詩と言う風雅な遊びにより、古人と心をかよわせて、少しずつ高みへ上るよう、根気よく続けてゆくことが求められる。

⑥ 初級者から上級者までを対象に、漢詩の実作指導をする。作品のレベルに応じて、講師・添削し作詩力を高めるように指導される。

このように、色々なレベルに応じて講座が設けられているので、ご自分の希望に合ったものを選んでくださり、参加されますようお願いいたします。

漢詩作法教室一覧

	教室名	講師	曜日	時間	主催者・会場	問合せ先(主催者)
①	新・漢詩作法初級講座	窪寺啓先生・河野光世先生	第1土	13:00-15:00	斯文会・斯文会館(御茶の水)	03-3251-4606
②	漢詩作法入門講座(入門)	窪寺 啓先生	第3土	13:00-15:00	同上	同上
③	漢詩作法初級講座(初級)	窪寺 啓先生	第3土	10:00-12:00	同上	同上
④	漢詩作法(中級)	石川忠久先生	日曜又は祝日、月1回	12:40-14:10	同上	同上
⑤	聖社詩会(上級)	石川忠久先生	同上	14:20-16:20	同上	同上
⑥	漢詩創作(初～上級)	鷺野正明先生	同上	15:15-17:15	同上	同上
⑦	漢詩実作	窪寺啓先生	第1金	10:30-12:00	朝日カルチャーセンター横浜・ルミネ横浜8F	045-453-1122
⑧	初めての漢詩作り	古田光子先生	第3土	10:00-12:00	朝日カルチャーセンター湘南・ルミネ藤沢9F	0466-24-2255
⑨	創作!漢詩教室(入門・初級)	水城まゆみ先生	第3火	10:15-12:15	産経学園新百合ヶ丘・エルミロード6F	044-965-0931
⑩	鎌倉漢詩会	磯野衛孝先生	第1、3月	10:00-12:00	磯野衛孝・鎌倉論語会館	0467-25-3281
⑪	湘南吟社(上中級)	玉井幸久先生・城田六郎先生	第2水、奇数月	13:00-17:00	三上光敏(世話役)・戸塚法人会館	046-848-3153
⑫	漢詩創作研究会(中級)	小嶋明紀子先生	日曜、月1回	9:30-11:30	小嶋明紀子・アットビジネスセンター横浜西口駅前	090-6100-3390
⑬	(参考:通信添削) 漢詩実作通信講座	窪寺啓先生。年6回添削が受けられる。			斯文会	03-3251-4606
⑭	二松詩文会	3ヶ月毎に、絶句2首の添削が受けられる			二松詩文会	03-3261-3535

注) 情報の正確さについては万全を期しているが、もし一部に漏れ・誤りがあればご容赦願いたい。

横浜 窪寺啓先生の教室紹介

以文会 松井秀人

(指導方式)原則として、前回に提出した題詠詩一首を、個別に批評添削指導。

(内容・特色)

各自提出の詩稿を先生が個別に批評添削され、当日に一覧性の教材として配布。

各自のレベルに応じて、一人ひとりに具体的に問題点を指摘し、細かく丁寧に批評添削されます。使用する漢字一語一語の選定も吟味し、当日の教室で実作が完結されることが特色です。さらに、批評から漢詩関連知識の解説に発展することも多く、これらも大いに勉強になります。また質問にも丁寧に対応してください。

従って、自作詩の批評添削結果が勉強になるだけでなく、他の人の批評添削結果や質問等が大いに参考になります。先生が批評添削された資料が、書かれた貴重な実践教材として手元に残るため、効果的な事後復習も可能になります。

はじめての漢詩作り

「朝日カルチャーセンター湘南教室」紹介

八起会 村上良明

JR藤沢駅ビル九階、窓から富士山を仰ぎ、古田光子教室がある。毎月第三土曜日二時間。恒例は先生が選んだ漢詩の解説、鑑賞、唱和である。李世南の秋景画から詩を詠んだ蘇軾の漢詩などは、私には印象的であった。

次に、受講者作品に批評が始まる。先生の永年の教師の体験からか、小刻みに走るチョークの音が、懐かしく教室に響く。先生は批評に妥協はしない。作品に「朱」が入り、私達生徒は反省の糧をうる。

そして各自自宅で、当月末までに、翌月の新作に励む。今度こそはとの思いで、この繰り返しである。作品は先生に予め郵送する。

この湘南教室の歴史は古く、故中山清神漢連会長から引継いで、古田先生五年になる。現在十三名全員神漢連の会員である。席の余裕は少ない。

新百合ヶ丘産経学園 創作！漢詩講座の紹介

武田利廣

小田急新百合ヶ丘産経学園での漢詩教室は五年目に入り、私は第一回目からの受講者です。講師は神奈川漢詩連盟副会長の水城まゆみ先生です。授業の内容は、論語の斉唱(五章)・漢詩鑑賞二首・漢詩作品の批評・漢詩の組み立てを毎回やっています。

最近ではなぜ批評されたか理由が書かれて戻って来ますので、次回作る時に役に立ちます。先生の批評に基づく話し合いで苦心談を交え毎回楽しく学ぶことができます。二十八字で自分の思いや体験を表現できる漢詩作りは、その詩を作った時の情景や、思いが詰まっています。作品は教室の一週間くらい前までに提出しています。皆さんも一緒に漢詩作りを始めませんか。

「二松詩文」の紹介

九詩期会 宇野次郎

「二松詩文」は二松學舎大学二松詩文会が、年四回配布している漢詩冊子である。二松詩文会は、漢詩文の振興を目的とする会であり、会員は冊子配布毎に漢詩二首の無料批評を受けることができる。批評後の作品は会の判断で冊子に掲載される。掲載されている漢詩には、錚々たる神漢連の先生たちの作品もあり参加に気後れするが、私は自分の漢詩創作向上のために参加した。

詩語に「三多」という言葉がある。文章上達の三条件は、多く読む「看多」、多く作る「做多」、そして多く工夫する「商量多」と言われる。神漢連サークルに入っておると年六回漢詩六作を否でも応でも作るが、いかにも少ない。漢詩創作の機会を増やすため私が、人伝えに聞いてきたのが「二松詩文」であった。年四回八作を作るとサークルと合わせ十四作となり月一作以上となる。

漢詩の向上のためには作るだけでなく先生に添削してもらわねば向上が望めない。その点では、二松詩文会はサークルと違って顔が見えないので、先生より厳しい指摘があり勉強になる。例えば、安易な「踏み落し」につき「表現を工夫すれば必ず押韻出来ます」、漢詩の内容につき「感想を述べているだけで詩的ではありません」、新年の漢詩につき「こういう詩は皆さん作りますが、作者ならではの視点でよりよい詩を目指して下さい」など。特に初心者の方の参加されることをお勧め致します。年会費 六千円。

漢詩と私

——杜甫の詩に学ぶ——



桜庭慎吾

私の漢詩歴は高校二年の時、発刊された許りの「新唐詩選上・下」を貪るように読んだことから始まる。その後、中年になってから吉川幸次郎の「杜甫ノート」により杜甫の詩の面白さに目が開かれ、吉川の「杜甫私記」や「杜甫詩注」などを読むようになった。

さて、詩とは何か、詩情とか詩心こころについて考えてみたい。作詩する立場からは、感動があつて詩心を刺激し、それが自然に言葉となつて口をついてくるものが詩であろう。口占とか口號という言葉のあるゆえんでもある。

この意味では、詩は作るものではなく一生れるものと言う把え方は正しいであろう。

さて杜甫の詩を例にとり感動と詩の生成について考えてみたい。杜甫の成都時代の作に、「江碧にして鳥は愈いよよ白く、山青くして花は然しかんと欲す。今春看みす又過すぐ、何れの日か是れ帰年。」

五言絶句の二十字に杜甫の気持が凝縮している。エメラルド色の川、眞つ白い鳥、緑におわれた山々、それを彩るもえ盛る花。自然は自己の営みを充分に展開している。このような自然の姿に向き合った時、詩人はかえつて流遇の境地にある自己の姿、そして十全に自己を展開し得ない現実をまざまざと思い知らされる。この残念な思いが自ずと呻きにも似た後半の二句に表出される。

次に「登高」について考えてみたい。「无边の落木蕭々として下おち、不尽の長江滾々として来たる。」

地をおおう視野のかぎり無辺際に広がる落葉の林、また眼下をより上る様にぐらぐらと流れる長江、それは中国の国土を育んできた母なる河でもある。自然や大地が悠久の営みを展開する姿に向き合っている詩人は大きな感慨を抱くのである。

以下、吉川幸次郎の評言を「新唐詩選」から引用する。「杜甫が天地のざわめき、うごめきをいうときは、いつもきつと彼自身の人生のうごめき、ざわめきを、みちびき出さんとしてである。この詩においても、杜甫は今や、みずからの苦悶を表白してよい。いや表白せずにはおれぬ。」

以下詩の後半杜甫の言葉として、「万里に秋を悲しんで常に客と作り、百年の多病に独り台に登る。…」と。杜甫の呻うめきにも似た独白のなかに、読む者は深い感動を覚えるのである。

漂泊の旅を続ける杜甫は「旅夜書懷」において、

「星垂たれて平野濶ひろく、月湧いて大江流る。名は豈に文章をもつて著あらわれんや、……飄飄として何んの似る所ぞ、天地の一沙鷗。」

と詠い、天地の運行と、悠久の長江の流れの中にいる詩人は、率直に自己の置かれている状況を認める心境に達している。筆者は、天地の一沙鷗の表現に流浪のさなかにあつて却つて拘束されない精神的自由を獲得しえた詩人の心境を感じるのである。

そして「天地の一沙鷗」と天地を自由に飛翔する鷗を自己として把え得た所に「情」と「景」の一致を見出すのである。この情景の一致は伝統的に中国の詩が目指して来たものであり、また我が芭蕉が自己の俳句と言う文学の骨格にも据えた理念である。

以上、詩情とは何かと言う本論テーマのテーマに対して、ひとつの解答としたい。

今回、採り上げた三つの詩の他に杜甫は千四百余首の詩を遺している。その詩を読み解くプループ(探り針)として、今回の手法が全て適用できるとは限らないが、先述の吉川の「天地のざわめきを述べるとき、それはきつと杜甫自身の人生のうごめき…」と言う言葉は、杜甫の詩を読み解く重要なワードであることを指摘して筆をおきたい。

神漢連会員「平成二十九年扶桑風韻漢詩大会」で活躍

優秀作品

杉森千枝美

小笠原諸島智島戦跡 小笠原諸島智島戦跡

孤島潮回南海頭 孤島潮は回る 南海の頭

屯營壁壘變荒丘 屯營壁壘 荒丘に變ず

二千里外故山遠 二千里外 故山遠く

征客北望登戍樓 征客北望 戍樓に登る

優秀作品受賞に憶う

このたび、思いがけず優秀賞をいただきました。まことに有難いことです。

この詩では、兵士が南海の孤島の物見やぐらに登って故郷を望み見たであろうと想像・推測しました。訓(よ)み下し文を「征客 北望せんと 戍樓に登らん」として、ちよつと無理があるかなと思っていました。

果たして、戻って来た応募詩稿の「審査会コメント」にこうありました。「征客はここでは普通の旅人で問題なし。」結局で戍樓に登って北望しているのは往時の兵士ではなく、現在の旅人＝作者自信ということ。そのように読めるとは思いつきませんでした。作詩にはまり込んで客観視できなくなっていたのです。反省。

扶桑風韻の冊子には「征客北望戍樓に登る」

と直していただいで載っています。

今回の賞を励みに、はじめに詠もうとした戦跡に残された一升瓶を登場させ、手を加えて更に高められた詩に育てていきたいと思えます。

佳作

小嶋明紀子

秋過鸚鵡洲

秋に鸚鵡洲に過ぎる

孤舟維纜暮江頭

孤舟 纜を維く 暮江の頭

月下雁過黃鶴樓

月下 雁は過ぎる 黃鶴樓

遐想禰生千古恨

遐想 禰生 千古の恨み

寒風猶繞荻蘆洲

寒風 猶ほ繞る 荻蘆の洲

入選

繪島

繪島

瑞擘 尾崎 明子

湘南繪島儼蘭船

湘南の繪島に蘭船を儼う

忽見艫頭截碧漣

忽ち見る艫頭碧漣を截るを

絶壁鳴鳶相戯處

絶壁 鳴鳶相い戯る處

中天富嶽白渠蓮

中天の富嶽 白渠蓮

奮って応募しよう!

詳細は、グーグル等で各大会を「検索」。

漢詩応募規定・用紙は、各大会のホームページからも入手できます。

●平成三十年度全日本漢詩大会・全日本漢詩連盟設立十五周年記念大会

九月八日・九日 東京

詩題 「江・河・川にかかわるもの」、自由題も可

応募期間 二月一日～四月三十日

●平成三十年度全日本漢詩連盟「扶桑風韻」漢詩大会

詩題 「家・屋にかかわるもの」

応募期間 九月一日～十一月三十日
応募資格は全漢連正会員及び準会員

●第二十一回全国ふるさと漢詩コンテスト

十二月二日 表彰式 多久市

詩題 「夜(又は宵)」

応募締切 八月十五日

●第三回漱石漢詩記念漢詩大会

十二月一日 熊本市

自由題

応募期間 五月一日～七月三十一日

●第十回諸橋轍次博士記念漢詩大会

十一月十日・十一日 三条市

自由題

応募期間 五月一日～九月七日

平成三十年の全国漢詩大会の予定

神奈川県漢詩連盟 今年の行事予定

●平成三十年度全日本漢詩大会・全日本漢詩連盟設立十五周年記念大会

(千葉県・東京都・神奈川県漢詩連盟共同開催)

期 日 平成三十年九月八日(土)

時 間 午後一時三〇分～五時(漢詩大会)／五時三〇分～七時三〇分(交流懇親会)

場 所 二松學舎大学 中洲記念講堂／九段一号館一三階多目的ホール

参加申込 漢詩大会は申込不要。尚、交流懇親会は申込要(有料、八月二十日迄)

吟行会 九月九日(日)「沼津御用邸記念公園見学と三嶋大社参拝バスツアー」

(有料、申込み期限は七月三十一日)

●研修会

期 日 ①平成三十年十月十九日(金) ②十月二十四日(水) ③十月三十日(火)

時 間 午後一時～午後五時

場 所 神奈川近代文学館中会議室

参加申込 本会報同封の用紙をご利用下さい。尚、詩稿の締め切りは九月二十五日。

●漢詩講演会

期 日 平成三十年十一月六日(火)

時 間 午後二時～午後四時

場 所 神奈川近代文学館ホール

講演者と演題 市川桃子先生 「遠い友 心の旅」

参加申込 不要。会員以外も参加可能。

●中国西安漢詩ツアー 兵馬俑・華清池・陝西歴史博物館・大雁塔・楊貴妃墓等

期 日 平成三十年九月十九日(水)～二十三日(日)

費用 十七万円(税込)、最少随行人員十五名。

参加申込 六月末で一応締め切っていますが、高津事務局長(046-233-7641)にご相談下さい。

●吟行会

来年三月頃で検討中。

編集後記

今年は高速で進む季節を追いかけるように

百花先を争って発き春が瞬く間に過ぎていった。会報がお手元に届くころはたして紫陽は

終わりに梔子が香っているであろうか。春から夏に移り変わる杜甫の絶句漫興九首その八。

舎西柔桑葉可拈 舎西の柔桑 葉拈むべく

江畔細麥復纖纖 江畔の細麥 復た纖纖たり

人生幾何春已夏 人生幾何ぞ 春已に夏なり

不放香醪如蜜甜 香醪をして蜜の如く甜からしめ

ざらんや

久し振りに漢詩本以外の読書の時を過ごした。漢詩作りにおわれ久しく読書の楽しみか

ら遠ざかってしまっていた。楽しみにしていた老後の過ごし方とあまりにもかけ離れてしま

った今、漢詩楽しくも又、恨めし。

二〇一八年と平成三〇年に馴れてきたところ

で、来年五月には元号が変わる。どんな漢

字がつかわれるのであろうか。これからしばらくは漢字に多少注目が集まるのではないだ

ろうか。

政治学者いわく、リーダーの周辺に忖度が

起るとき、そのリーダーは国家と社会、個人

にとって危険な存在である。忖度する個人の

行動が国家と社会にはびこることになる

云々。さて、自浄力が劣ると言われる日本、

新元号の下、「俟河之清、人寿幾何」とならな

いことを期待するのは無理だろうか。

(大森列子)